

上智大学名誉教授・大妻女子大学教授 山田幸三氏 弔辞

加護野先生のご霊前に謹んでお別れの言葉を申し上げます。

加護野先生、先生のご逝去を未だに受け入れることができず、この場に立っていることにも、深い戸惑いを感じています。

先生は、調査、研究において、フロンティアであり続けられました。研究者同士のつながりをいかし、大学の枠を超えた調査・研究を積極的に企画され、その成果をいち早く世に問うてこられました。経営学の理論的發展に強い意欲を持たれ、特に企業における創造と革新について認識論の視野から進められた研究は、経営戦略研究の新たな地平を切り開くものでした。また、企業の中よりも、企業間の取引にこそ日本的な特徴が見いだせるといったように、先生の著書や論文にこめられた、明解で奥深いメッセージは、今なお、多くの研究者や実務家を啓発し、広く支持され続けています。

懐が深く、泰然自若とした風格を備えた先生は、経営学の泰斗と呼ばれ、組織学会会長や、企業家研究フォーラム設立発起人代表などを通じて、日本の経営学的发展と、関西の産学連携に多大な貢献をなされました。われわれ門下生にとって、常に第一線で活躍され、実証主義に立脚した理論の構築と、その発展に尽力する姿は、まさに行く先を照らす灯台のような存在でした。若手研究者とともに取り組まれた調査・研究では、何らかの新しさを追求し、考えを深めることの大切さについて、研究者自身が、気づきを得られるよう導く指導を通じて、経営戦略と経営組織の分野を中心に、数多くの研究者を育てられました。院生や社会人院生が関心を持つ、広範で多様な研究テーマの自由な設定を許容された指導の成果として、先生の薫陶を受けた研究者が、全国の大学で経営学の研究と教育を担い、その志を受け継いでいます。

学術の世界にとどまることなく、実社会に深く根差したその哲学は、私どもの中に、確かに息づいております。調査・研究にのぞまれる際の厳しい姿勢の中にも、常に門下生や若手研究者を思いやるあたたかさと飾らぬユーモアがあり、心に響くアドバイスは、あの笑顔とともに今なお、心に深く刻まれています。

ご生前、先生とアメリカ西海岸での調査にご一緒させていただいた折、調査の目途がたつたと実感されたのでしょうか、先生は、ゴールデンゲートブリッジを目の前にして、思い出のサンフランシスコを口ずさまれました。美しい夕焼けの中に浮かぶその情景と充実感あふれる先生の満面の笑みは、今も鮮やかに心に残っています。

加護野先生、長きにわたり、本当にありがとうございました。経営とは、人間の営みであり、人を生かす知恵の体系であること、また、健康第一で研究を進めることの大切さを教えていただきました。初めて六甲台でお目にかかってから 40 年、私の学部時代の恩師の新野幸次郎先生から、若さと将来性では加護野忠男さん、と紹介されてから 40 年。いろいろなことがありました。やはり私と先生を結びつける役割を果たしてくれた、黒川晋くんが若くして亡くなったとき、先生は私の隣でひと言、「早かったね」とおっしゃられました。私は今、その言葉の重みをあらためて感じています。

いくつもの研究プロジェクトをご一緒に進め、世に問えたことは、私にとって何よりの幸せであり誇りです。今はただ、深い感謝の念とともに、先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。先生、ありがとうございました。